

あしたか 愛鷹山の天狗 てんぐ

平成七年二月五日号

昔、愛鷹山には、いろいろな天狗が住んでいたということですが。この天狗について、数々の昔話が言い伝えられています。

今回は、この愛鷹山の天狗のお話を紹介します。

昔、愛鷹山には、たくさんのイノシシがいました。そして、冬になると里までおりてきて、農作物を食い荒らしていました。

ある日、村人たちは、大勢で山の奥までイノシシ狩りに行きました。ところが、イノシ

シを追いかけているうちに日は落ち、あたりは暗くなつてしまいました。仕方なく村人たちは、山小屋で昼間とつたイノシシを料理し、酒盛りを始めました。

鍋を火にかけていると、急にいろりの火が吹き出し、鍋の肉がクタクタ音を立てて煮え始めました。みんなが不思議がつっていると、小屋の戸が開き、ぬうつと大きな毛むくじやらの手が出てきました。

みんな、びっくりして小屋の隅でガタガタ震えていると、「おんにも、くりよう」と、とても人のものとは思えない声で言うのです。「おれにもイノシシの肉をくれ」と言っているのですが、恐ろしくて、だれも動けないです。と、一人の元気のいい若者が、鍋の中で煮えだぎっているイノシシの肉を、その大きな毛むくじやらの手に載せました。

すると、とても大きな声で「熱い」と叫んで、飛んでいってしまいました。この大きな



▲ 愛鷹山ろく

声が山中にこだまし、しばらく静まりません
でした。やがて、もとの静かな山に戻ると、
村人たちは「今のは天狗だな」と話し合いま
した。熱い肉を持った天狗は、これにこ
りて二度と山小屋付近に出なくなつたとい
うことです。